

ハンス・カロッサの『日記』について

金子孝吉

エーファ・カンブマン＝カロッサの編集によるハンス・カロッサの『日記』Tagebücher（全3巻）が、現在インゼル書店から刊行中である。

第1巻（1910－1918年）は1986年に、第2巻（1925－1935年）は1993年に出版された¹⁾。第3巻は、近いうちに刊行予定ということであるが、現時点では、まだ出版されていない。

さて、作家カロッサの『日記』は、日記という形式をまとって実際は虚構の世界を物語る、というような〈創作日記〉ではもちろんない。また、たとえばフリードリヒ・ヘッベルの書き残した有名な日記のように「後世の伝記作者たちのために」書かれたもの²⁾、つまり、あとで他の人たちが読むのを最初から念頭に置いて綴られたものでもない。カロッサの『日記』は、そのほとんどが、まったく自分自身のためだけに、すなわち、彼が日々体験したこと、考えたことを、あとで思い出すことができるために書かれたものである。

カロッサは、小説『ルーマニア日記』の最後近くで、主人公に、彼がなぜ日記を書くのかについて、次のように語らせている。

以前、私はなんのために手記を綴るのか、わからなかった。だが、今では、

1) Hans Carossa: Tagebücher 1910－1918. Hrsg. von Eva Kampmann-Carossa. Frankfurt a. M. (Insel) 1986. [以下TB Iと略記]; Hans Carossa: Tagebücher 1925－1935. Hrsg. von Eva Kampmann-Carossa. Frankfurt a. M. und Leipzig (Insel) 1993.

2) Friedrich Hebbel: Werke. 4. Bd. [Tagebücher I] München (Carl Hanser) 1966, S. 7. カロッサが日記をつけた目的は、ヘッベルとは異なるものではあったが、カロッサはヘッベルの『日記』を熱心に読んでいたという。Vgl. TB I, S. 502 (Anmerkung von Eva Kampmann-Carossa).

私にとって手記とは、ヘンゼルとグレーテルが無事に家に帰るために、森のなかにまいておくパンのかけらのようなものだ。

今回出版されている『日記』を編集した、エーファ・カンブマン＝カロッサ（カロッサの長女）は、この言葉はそっくりそのままカロッサの『日記』にも当てはまる、と述べている⁴⁾。実際彼の『日記』は、そのほとんどが、詳しい形容句や、動詞などを極力省いて、主に名詞などをそっけなく連ねたメモのような書き方がなされている。それはまさしく、自分だけがあとで読んで理解できればよいといった書き方である。そのような綴り方のスタイルからしても、彼が『日記』を書いたのは、まず第一には、のちに、自分が以前体験したことを思い出すときのよすがとするためだった、ということができる。カロッサの『日記』は、ちょうど我が国の斎藤茂吉の『日記』⁵⁾がそうであったように、なによりもまず、実用的な〈備忘録〉の役目を果たすものだったのである。

そういった意味では、カロッサの『日記』は一般の人たちの日記と似ているといってもよい。カロッサの『日記』も、通常の日記と同じように、一日の天候の記録からはじまって、日常的な様々な出来事やそれについての感想などが簡略な文体で書かれている。

しかしながら、確かにそのような点、すなわち日記を書く目的とか文体の点では、普通の人の日記とよく似ているのであるが、カロッサの『日記』には、普通の日記とはずいぶん異なる特徴もある。それを、これから見ていくことにしよう。

まず、彼は作家であるとともに医師でもあったので、ときおり、医師としての仕事に関する様々な覚書も見かけられる。それが、カロッサの『日記』が普通の人々の日記と異なる、第一の点である（もちろん患者たちのプライバシーに

3) Hans Carossa: Sämtliche Werke. I. Bd. [以下 SW I と略記] Frankfurt a. M. (Insel) 1962, S. 484f. 1916年12月12日の日記の冒頭参照。[邦訳：ハンス・カロッサ全集第7巻所収『ルーマニア日記』（金子孝吉訳）臨川書店 1996, 103頁。]

4) TB I, S. 645 (Nachwort von Eva Kampmann-Carossa).

5) 「斎藤茂吉全集」（全36巻），岩波書店 1973～1976，第29～32巻所収。

係わるようなことは、いっさい書かれていない)。とはいえ、そもそも、医師としての仕事に関する記述が『日記』全体のなかで占める割合は、あまり多いとはいえない。

それよりも、カロッサの『日記』が単なる普通の人の日記と大きく違う点は、彼の生きた時代を代表する、文学・芸術関係の多くの著名な友人・知人との交際の記録が、そのなかに豊富に見出されることであるといえよう。この点に、カロッサの『日記』の重要な価値のひとつがある。

だが、それにも増して、カロッサの読者・研究者にとって重要な点は、彼の『日記』には、彼自身の作品の創作の進捗状況やプラン等について記したかなりの量のメモが含まれている、ということなのである。それらのメモは、カロッサの諸作品の成立過程、たび重なる推敲のプロセスを研究するうえで、たいへん貴重なものである。たとえば、彼がその生涯をかけて取りくんだ自伝的四部作——総称して『若いころの物語』Jugendgeschichte と呼ばれる連作、すなわち『幼年時代』から始まり、『青春変転』、『美しい惑いの年』を経て、『若き医師の日』で終わる四部作——の制作経過について、今回出版された『日記』は、きわめて詳細な情報を提供してくれる。またその他、彼のいくつかの詩作品についても、その構想の初期段階から、いくたびもの修正を経て、ようやく完成に至るまでの創作のプロセスが、『日記』中に詳しく書き込まれている。そういった点で、彼の『日記』は、カロッサ研究者にとっては、それこそ無尽蔵の価値をもつといってもよいのである。

ここで、カロッサの『日記』が具体的にどんなものであるのか、——ごく一部ではあるが——その特徴がよく窺われるものを選びだし、実際に見てみることにしたい。今回取りあげるのは、主に1915年、彼がミュンヘンに住んでいたときの日記である。まず初めに、5月15日の日記。

5月15日、土曜日。昨日、クービーンの短い訪問。今回、彼は当地に来てから、気分がすぐれない。晩方、激しいどしゃ降り。夜のあいだに冷え込む。

曇り空のもと、公園の芝生の緑が濃い。チューリップの萼があちこちで折れている。騒がしいほどのつぐみの鳴き声。昨日、私は『告解』から解放された。

(イタリア内閣の総辞職。)

ひとは最も偉大で最も危険なことを、あたかもその背後に何ひとつ隠されていないかのように、このうえなく無邪気に物語らねばならない。いまなら、それはまだ容易だが、あとになると、もっと困難になるだろう、すなわち、もっと大胆さを必要とすることになるだろう。⁶⁾

いくらか注釈を付け加えることにしよう。まず、1行目の「昨日、クービーンの短い訪問」であるが、アルフレート・クービーンは、20世紀を代表する幻想画家（版画家）のひとりである。カロッサは、1910年に彼と知り合ってから、生涯にわたって親しい交際を続けた。カロッサの『日記』には、クービーンの名前がじつに頻繁に登場する。グロテスクで陰鬱きわまる絵を生涯描きつづけ、もっぱら世界の暗黒面を眺めていたクービーンと、明るい光の世界を常に求めつづけた、調和的精神の持ち主であるといつてよいカロッサ、このまったく対照的な二人が、生涯を通じて友情を保っていたのは、たいへん興味深いことだといえよう。⁷⁾

第一段落の最後に、「昨日、私は『告解』Beichteから解放された」とあるが、『告解』というのは、カロッサの、のちに『幼年時代』と題されて発表された作品の中にある、一つの章の名前である。つまり、ここは、昨日ようやく『告解』の章を書き終えることができた、ということの意味している。このように『日記』は、作家カロッサのいわば〈作業日誌〉のような役目も果たしているのである。

6) TB I, S. 178.

7) カロッサとクービーンの関係について比較的詳しく論じたものに、Jörg Kastner: Hans Carossa und Alfred Kubin. Ideogramm einer Freundschaft. In: Alfred Kubin 1877–1959. Hrsg. von Annegret Hoberg. München (Edition Spangenberg) 1990 がある。

次の、括弧で囲まれた「イタリア内閣の総辞職」という記述について。第一次大戦に、はじめ中立を保っていたイタリアは、この時期、領土拡張をねらって、結局連合国側につくことに決め、9日後の5月24日にオーストリア＝ハンガリー帝国に宣戦布告するのであるが、この日、イタリア国内の政治的混乱のなかで、内閣が総辞職したことが記されているのである。

続く「ひとは最も偉大で最も危険なことを、あたかもその背後に何ひとつ隠されていないかのように、このうえなく無邪気に物語らねばならない……」以下であるが、これは、『幼年時代』を執筆する際に取るべき態度について省察をおこなっている文である。こういった箇所からは、カロッサの創作姿勢、あるいは創作理念といったものを明瞭に見てとることができる。

次に、同年5月18日の日記をのぞいてみよう。

5月18日、火曜日。クービーンとともに、リルケ宅へ。アルペール夫人、そしてルー・アンドレアス＝サロメ。クービーンによるヴォルフスケールのもものまね。リルケが、ロシアとスペインについて美しく語る。湿原にあらためて行くこと。⁸⁾

この日は、クービーンと一緒に、当時やはりミュンヘンに住んでいたリルケの住まいを訪ねたこと、そして、リルケから、彼が昔ルー・サロメとともにおこなったロシア旅行、そしてつい最近のスペインへの旅について話しを聞いたことが書かれている。「アルペール夫人」とは、画家のルル・アルペール＝ラザールのことを指す。当時のリルケの恋人で、彼としばらくの間生活をともにしていた女性である。続いて、「クービーンがものまねをした」という記述がある。クービーンが生涯、暗鬱で救いのない絵ばかり描いていたことから、私たちは、彼の性格もまた、ひたすら陰気であったように思いがちであるが、意外なことに、「ものまねをする」というようなひょうきんな一面をも彼が持ち合わせていたことを、この記述は私たちに教えてくれる。これは、クービーンの日

8) TBI, S. 178.

常時の思いがけない姿を伝える貴重な記録といえよう。

最後の「湿原にあらためて行くこと」Der neue Gang ins Moor というのは、これもいわば作業日誌のようなものである。カロッサの作品『幼年時代』Eine Kindheit の初稿で、『序曲』Vorspiele という作品があるが、そのなかの一場面⁹⁾を、この日に執筆またはスケッチした、あるいは少なくともそれに関係ある作業をおこなったことを意味している。すなわち、『序曲』の最後近くに、主人公の少年が母親から、花のためのよい肥料になる腐った木の屑を取ってくるように言われて、友達のエーファと連れ立ってイーザル川の湿原へ行く話がある¹⁰⁾。その部分に関するなんらかの仕事を、この日したということを示しているのである。ただし、この場面は、最終稿の『幼年時代』においてはカットされた。その代わりに、この湿原行きのエピソードは、のちの作品『指導と信従』Führung und Geleit のなかに取り入れられている¹¹⁾。さらに、興味深いことには、その『指導と信従』のなかでは、主人公はエーファと一緒にではなく、一人で湿原へ出かけることに変えられている。

このように、彼の作品の萌芽状態を見ることができるといえる点、また作品構想の変化の過程を具体的に追跡することができるという点で、彼の『日記』の出版は、カロッサ研究にとってたいへん意義あるものとなっているのである。

もう一日だけ見ることにしよう。1915年6月3日の日記である。

すばらしく晴れ上がった、暖かい聖体の祝日。私が書いている新作、夢の詩は、まだ一連 eine Strophe 不足しているように思われる。こういった種類の私の詩は、クライマックスの部分を終えたあと、いつも終結に向かって、あまりに早く急ぎすぎてしまうのだ。文学上のさまざまな問題についてのベルトラムの的確で辛辣なコメント。彼の精神は、ほとんど鋭く尖り過ぎなくら

9) Hans Carossa: Vorspiele. Das Buch »Eine Kindheit« in seiner ursprünglichen Fassung. Hrsg. von Eva Kampmann-Carossa. Frankfurt a. M. (Insel) 1984. この作品は、注3)であげた Hans Carossa: Sämtliche Werke には収録されていない。

10) Ebd., S. 168ff.

11) SW I, S. 669ff.

いだ。(プルツェミスルの征服)。シュティーヴェ宅を訪問¹²⁾。

「夢の詩」Traumgedicht というのは、最終的には「聖者の手の上の町——ある少年の夢」Das Städtlein auf der Hand des Heiligen. Traum eines Knaben.《¹³⁾と題されて公表された詩のことを指す。カロッサは、前線で軍医の仕事をするかたわら、この詩を何度も書き直し、推敲を重ねて、1918年になってようやく発表している。ここに、「まだ一連不足しているように思われる」と書いてあるが、実際、この詩は完成稿では、96行もの、かなり規模の大きな詩となったのである。

その次に、ベルトラムの名が見える。カロッサとエルンスト・ベルトラムとの交友は、『指導と信従』のなかでも詳しく描かれているが、『日記』の方には、簡略な記述ながらも、ふたりの交際の具体的な記録、つまり、いつ、どこで会ったか、ときにはどういうことを話し、その際どう思った等が、几帳面に書き留められている。

括弧のなかの「プルツェミスル」というのは、ガリチアの都市の名前であるが、この日ドイツ軍がロシア軍からこの町を奪還したことが、ここに記録されているわけである。

最後の「シュティーヴェ」というのは、歴史家兼翻訳家、外交官でもあったフリードリヒ・シュティーヴェ（1884—1945）のことである。彼は、カロッサの作品を高く評価していた人物である。

以上、ほんの一例しか見ることができなかったが、今読んだ日記の部分のなかにも、クービーン、リルケを初めとして、ルー・サロメやベルトラムらの名前があがっている。カロッサの『日記』には、その他にも、数多くの著名な同時代人たちとの交友が、簡略的な書き方ではあるが、きわめて具体的に豊富に記録されている。——もちろん、ほぼ同時代に書かれた著名な日記、ハリー・

12) TBI, S. 179.

13) SW I, S. 48ff.

ケスラー伯爵の『ワイマール日記』¹⁴⁾に見られる、まさに豪華絢爛な交友関係に比べれば、カロッサの方は、だいぶんつましいともいえるが、それでも興味深い人物が多数登場しているのである。

カロッサは、たとえば『指導と信従』などの、いわゆる〈自伝的作品〉においても、リルケ、ホーフマンスタール、ツヴァイク、ベルトラム、ヴォルフスケールらとの交友関係に言及している。しかし、それらの作品中では、彼らの形姿は多かれ少なかれ〈様式化〉stilisierenされて、つまり、かなりの〈詩的変形〉を被って描かれているといつてよい。それに対して、『日記』のなかでは、彼らの姿が、なんの飾りもなしに、いわば〈生の〉のかたちで捉えられている。

(5月18日の日記で見た、「ものまねをする」という、クービーンの思いがけないユーモラスな一面を伝える報告などは、その代表といえよう。)彼の『日記』においては、それらの同時代人に対するカロッサの〈肉声〉を聞くことができるのである。その点にも、彼の『日記』の大きな価値がある。

またカロッサは、『日記』の中に、先ほど見てきたように、創作日誌、創作プランのようなものを書き残していたのであるが、さらに、ときには彼は——先の例では見ることはできなかったが——『日記』の中に、自身の詩や小説のスケッチ、下書きを記入していることさえある¹⁵⁾。そのような箇所は、作品の雛形を目の当たりにすることができるという点で、たいへん興味深いものである。これも、カロッサの『日記』が彼の読者・研究者にとって持つ重要な意義であるといえよう。

あるいは、カロッサは『日記』で、自己の創作についての反省をおこない、執筆についての考察をいろいろと巡らしている。先ほど見た例のなかにも、

14) Harry Graf Kessler: Tagebücher 1918–1937. Frankfurt a. M. (Insel) 1961. [邦訳が近年出版された。ハリー・ケスラー『ワイマール日記』上・下 (松本道介訳) 富山房 1993~1994.]

15) たとえば、1913年12月16日(TB I, S. 166)や1915年7月19日(TB I, S. 186)の日記には、詩「聖者の手の上の町」の下書きの一部が書き込まれている。その他、彼の作品の草稿が見られるのは、1914年4月3日(TB I, S. 175), 1914年4月14日(TB I, S. 176), 1915年8月19日(TB I, S. 188f.), 1918年2月14日(TB I, S. 366f.) 等々。

Traumgedicht に関してそういった箇所があったが、ほかにも、たとえば1915年6月9日の日記には、

伝記的作品というのは本来、匿名で出版されるべきなのだろう。いまや私はその仕事については、作品を構成する諸元素 Elemente がそれに従って分離し、またそれを手がかりにして結合しあう<結晶軸>Kristallisationsfäden を作り出させさえすれば、書き始められる段階にきている。平凡であることをけっして恐れてはならない。さもないと死産になってしまう¹⁶⁾。

また1916年10月1日の日記には、

それらすべては、子供っぽく kindisch 響いてはならない。だが、子供らしさ das Kindliche を強烈に感じさせなくてはならないのだ。¹⁷⁾

というような、自伝的作品『若いころの物語』の執筆に関係した考察が見られる。このような、自己の作品創作についての注目すべき省察が、『日記』中には、しばしば展開されているのである。

さらにカロッサは、創作時の苦渋や躊躇を、『日記』に隠さず記している。それらを読むと、彼が執筆のうえで特に苦勞した箇所、あくまでこだわり続けようとした点が、手に取るようにわかる。

『日記』に窺われる、自作についての反省や創作上の苦悩の告白は、作家カロッサの信念あるいは理想といったものを、私たちに如実に伝えてくれるのである。

以上、カロッサの Tagebücher のだいたいの特徴について述べてきた。それらの特徴は、彼の『日記』のほぼすべてを貫いているといってよい。ただし、

16) TBI, S. 180.

17) TBI, S. 214.

1916年秋から1918年5月までの期間に書かれた日記は例外的で、その他の時期の日記とは、かなり異なった性格を持っていることを指摘しておく必要がある。すなわち、第一次大戦中、カロッサが軍医として戦場で過ごした時期に書かれた日記である。カロッサは、その他の時期に書かれた日記では、大体においてメモ風の簡略な書き方をしているのであるが、この時期には、ほぼ毎日、言うならばきちんとした普通の文章で、事細かに日々の出来事を記録している。いや、普通の文章というより、ほとんど作品を書いているといってもよいくらいに、整った、練り上げられた文体で綴っているのである。

第一次大戦のさいのカロッサの従軍体験は、彼が、1916年秋に西部戦線（北フランス）に赴き、その後まもなく東部戦線に移され、ルーマニア、東ガリチア、ブコヴィナを経て、再び西部戦線に戻り、1918年春に負傷して野戦病院に入れられるまで続いたが、その時期には、彼は——例外的に——ほとんど毎日、簡略化された文ではなく、まるで作品を執筆するような態度で、詳細な長い日記をつけているのである。

カロッサは、様々な新型の大量殺戮兵器が導入された未曾有の規模の戦争を間近で体験し、それを作家として、おそらくなるべく詳細に記録せずにはいらなかったのかもしれない。

ともあれ、この時期の日記の書き方——精練された、凝った文体など——を見ると、カロッサは最初から、この従軍の記録をもとにして作品をまとめようという意図を抱いていた、と言ってよいだろう。実際、彼は1924年に、1916年10月4日から12月15日までの彼の〈従軍日記〉という形式で、作品『ルーマニア日記』*Rumänisches Tagebuch*を發表しており、これは彼の代表作のひとつとなっている。

さて、『ルーマニア日記』は、従来一般には、カロッサが前線にいたとき実際に綴っていた日記をそのまま発表したものであると考えられがちであった。しかし、カロッサの本物のTagebücherが出版されてからは、そのような見方は間違いであることが、明らかになっている。作品『ルーマニア日記』は、彼の

実際の従軍体験を素材として使っているのは確かであるが、しかしそれに、かなり大胆な詩的変形を施して書き上げられたものであることが、わかっているのである。

それについては、私はすでに別の場所で少々論じているので、今回あまり詳しく述べるのは差し控えることにするが、たとえば『ルーマニア日記』に登場してくる様々な人物が、現実には存在しなかった架空の人物だったり、実在した人物の場合であっても、作品中ではかなりの文学的な様式化を受けて描かれていたりするのである。彼が作品のなかで書いているいろいろな事件に関しても、実際の『日記』には、作品中の日付けの日には起きていないことが頻繁に見受けられる。

ひとつ例を挙げれば、現実には北フランスで起こったことが、小説ではルーマニアの山のなかで起こったことに変えられている事例がある。

『ルーマニア日記』の最後近くで、主人公はショーシュテレクという村にあった一軒の家に泊まるが、そのとき、その家の持ち主である美しい母親が、二人の幼い娘とともに、壁に向かって熱心に祈る場面がある。12月12日の日記である。

私たちが食卓についていた時、三人は壁に向かって小声で祈りを唱えていた。ときおり頭を下げたり、十字を切ったりした。幼い妹の方はその度に、こぶしに精一杯力を込めてみぞおちをたたいた。彼女たちがそのように熱心に礼拝しているのは、いったいどんな十字架像または聖人画なのか私は知りたくなって、身を前にのりだして見てみると、その壁にあったのは一本の掛け鉤だけだった。ただし、その鉤の下の壁面には、黒く縁取られた、そこだけ明るい色をした四角形の部分があった。つまり、そこには聖人画が掛けられていたのだ。きっと長年のあいだ。ところが今はそれがなくなってしまった。おそらく兵隊たちが、たき木にでもしてしまったのだろうが、敬虔な彼

18) 臨川書店版ハンス・カロッサ全集第7巻所収『ルーマニア日記』〈解説〉参照。

女たちの眼には、その画はつねに変わることなく見えるのだろう。¹⁹⁾

これは、『ルーマニア日記』のなかでも特に印象的で、忘れがたいシーンのひとつであると思われるが、実際には、これと似たことは、9月26日に、北フランスで起こっているのである。ソンム戦線近くで、カロッサらの部隊が連合軍の戦闘機による爆撃を受けているとき、彼はふと、建物の窓を覆っていたカーテンを通して、ひとりの若いフランス人女性が、横にいる子供たちと一緒に跪き、マリア像に向かって熱心に祈っている姿を垣間見る。

司令部の宿舎となっている建物のカーテンを通して、寝間着を着た若い女性が跪いている姿が見えた。彼女は、二本の蠟燭のあいだに立っているマリア像に向かって一心不乱に祈っている。彼女の子供たちは、彼女の横に跪いて²⁰⁾いる。

この時の体験が、『ルーマニア日記』の最後のクライマックス近くの重要な場面に、作家の想像力によって変形され、じつに美しい詩的形象に高められて、はめ込まれたのである。

あと、もうひとつだけ例を挙げるならば、『ルーマニア日記』には、その扉の部分に、

「蛇の口から光を奪え！」

Raub das Licht aus dem Rachen der Schlange!²¹⁾

という、よく知られたモットーがある（作品中では、兵士グラヴィーナの手紙のなかにかかれていた言葉とされているが、それはカロッサの作り上げたフィ

19) SW I, S. 488. [邦訳：臨川書店版ハンス・カロッサ全集第7巻，107頁。]

20) TB I, S. 213.

21) SW I, S. 392.

クションであり、実際は作者自身によって考え出された言葉である)。このモットーは、恐怖と暗黒の戦争のなかにあっても、人はつねに、明るい生への意志と勇気を持たなければならない、ということの意味しているが、これも、作品の初期の発酵段階では、〈黄金の宝を、それを見張る恐ろしい龍の棲処から取ってこなければならない〉というような、北欧伝説を思わせる表現であったことが、『日記』を見るとわかる。すなわち、1916年9月から1917年元旦までの日記が綴られている、彼の小さな手帳の内側の表紙に、次のような文が書き込まれている。

Ich muß mir aus dem gräßlichen Wohnort dieses Ungeheuers einen von ihm behüteten kostbaren Schatz holen.²²⁾

これは、カロッサが、西部戦線に投入される前に、実際に戦場に赴くにあたっての彼の心の内の決意を綴った文であるが、これが、のちにモットーとなった文の最初期の姿であると考えられるのである。

さらに、1918年1月25日の日記を見ると、そこには、彼が幾人かの将校とともにベルギーのガンの大聖堂を訪ねたとき、その説教壇に、蛇の口から林檎²³⁾を取ろうとしている天使の像²⁴⁾があったことが記されている。

大聖堂。説教壇。少年の姿をした天使がなにをしようとしているかについて議論する。蛇の口から林檎をむしり取ろうとしているのか (den Apfel der Schlange aus dem Rachen reißen)、それとも蛇の口のなかに林檎を押し込もうとしているのか。私は、あくまでも前者を主張した²⁴⁾。

22) TBI, S. 192.

23) この彫像は、ロラン・テルヴォーの作で、原罪の克服を象徴的に表現したものといわれる。Vgl. Eva Kampmann-Carossa (Hrsg.): Hans Carossa. Leben und Werk in Bildern und Texten. Frankfurt a. M. und Leipzig (Insel) 1993, S. 137.

24) TBI, S. 362.

手帳の内表紙に書かれてあった、1916年秋の、北欧伝説を想起させるような決意表明の文が、1918年初めの天使像との出会いを経て、ますます凝縮された表現に変わっていき、最終的には、現在見られるような、じつに印象的な箴言を思わせる形になったのである。

このように、作品のひとつのモチーフが、時の経過や作者の経験の積み重ねとともに、どんどん姿を変えていく様子を観察できるのは、作品創造の知られざる仕事場をのぞくことができるようで、まことに興味深いことだといえよう。

こうして私たちは、小説『ルーマニア日記』と本来の『日記』とを読み比べることによって、カロッサの創作における、作品素材の取捨選択の仕方や詩的変形の手法などを、つぶさに見て取ることができるのである。そういった点でも、今回出版された『日記』は非常に大きな価値があるといえる。

カロッサの本物の『日記』と、それをもとにして書かれた作品『ルーマニア日記』とを実際に比べてみると、あるときは、『ルーマニア日記』の有名な motto の例に見られるように、本物の『日記』の少々冗長な記述が、作品では大胆に切り詰められ、強い象徴性を持つ、凝縮された表現に結晶化されている場合がある。また別のときには、何も無い壁に向かって一心不乱に祈る女性たちの場合のように、現実の体験に、作者によってかなりの詩的装飾・文学的アクセントが施されて、かなり拡大化された表現になっている場合もある。しかし、『ルーマニア日記』全体についていうならば、作品の方が、本物の『日記』よりも、一段と凝縮された表現になっているといえよう。それによって、『ルーマニア日記』は、素材となったもの『日記』と比べて、冗長・散漫な箇所がさらに少なく、最初から最後まで濃密な緊張感の漂う作品になったのである。

冒頭でも述べたが、カロッサの『日記』は、彼自身があとで過去の体験を思い出すときの〈よすが〉とするために書かれたものであり、他人が読むことをいっさい念頭に置かずに綴られたものであった。

カロッサは晩年になって、第一次大戦中に非常に細かい字で綴った日記帳を

手に取って読もうとしたら、視力の衰えのためにもはや読めなくなっていることに気づいたので、その日記帳を処分しようとした、といわれている。しかし、その場に居合わせた娘のエーファ氏が反対したので、あやういところで日記帳は捨てられずに済んだ²⁵⁾というのである。カロッサにしてみれば、彼の日記は、まったく自分だけのために書かれたものであり、公表するつもりも他人に読ませるつもりも毛頭なかったのであるから、本人が読むことができなくなった段階で、もはや用無しになったわけであろう。その他の日記帳についても、カロッサは、エーファ氏が捨てないように願ったので、それなら²⁶⁾ということで、無造作に彼の書き物机のうえに、置き残していったということである。

そのように徹頭徹尾個人的な目的で綴られ、他人に読まれることなどまったく想定されていなかったカロッサの『日記』には、それゆえ、彼本人にしか意味がわからないような書き方で綴られている箇所が、非常に多く含まれている。だから、カロッサの『日記』を解読することは、決して容易なことではなく、むしろかなりの労力を要求するといつてよい。

しかし、カロッサの作品に興味を持つ読者が、まさに幸運によって後世に残された彼の『日記』を丹念に読んでいくなれば、そこには、彼の作品、彼の詩的世界をより深く理解するための貴重なヒントが、尽きることなく湧き出ていることに気づくのである。

(1996.11.6)

25) TB I, S. 650 (Nachwort von Eva Kampmann-Carossa).

26) Ebd.

Über Carossas »Tagebücher«

Takayoshi KANEKO

In Carossas Tagebüchern stehen neben den logbuchartigen Aufzeichnungen über Meteorologisches, Alltägliches und den Beschreibungen von Erlebtem und Gedachtem, eine Menge Notizen über den Fortgang seiner dichterischen Arbeit und vielerlei Betrachtungen über das künstlerische Schaffen, manchmal sogar die Skizzen seiner eigenen Werke. Diese Notizen und Skizzen sind beim Verständnis seiner dichterischen Welt sehr behilflich.

Innerhalb seiner Tagebücher nehmen die zwischen 1916 und 1918 eine Sonderstellung ein, weil diese der „Rohstoff“ für sein Hauptwerk „Rumänisches Tagebuch“ geworden sind. Die sorgfältige Lektüre seiner Tagebücher im Ersten Weltkrieg ermöglicht uns, das Werk sozusagen im Entstehen aufzuhaschen.